

人生のスタートに育る兒童の常識を解決

奈良女子高等師範學校教授

桑野久任先生著

菊判洋裝函入 紙數六〇〇頁

定價 四圓五拾錢

送料 二十二錢

最新刊

育兒講話

父たる人、母たる人、教育者たる人の味讀すべき名著

第一章 育兒及兒童

- 一、育兒の定義
- 二、育兒の必要
- 三、育兒の目的
- 四、育兒の方法
- 五、育兒の效果
- 六、育兒の責任
- 七、發育の時期
- 八、發育の諸人
- 九、兒童の成人
- 十、兒童の寶

第二章 胎兒

- 一、胎兒の形態とその發育
- 二、胎兒の生理
- 三、胎兒の確證
- 四、妊婦の身體
- 五、妊婦の養育
- 六、胎兒の養育
- 七、胎產科
- 八、產婆と産科
- 九、多産
- 十、誕生の前途

第三章 胎兒の豫定日

- 一、誕生の準備
- 二、誕生(外九節)
- 三、乳兒の養育
- 四、乳兒の營養材料
- 五、乳房及乳腺
- 六、乳兒の身體
- 七、乳兒の發育
- 八、乳兒の生理
- 九、乳兒の死亡率
- 十、天、地、人

第五章 幼兒及少年

- 一、乳兒の精神
- 二、乳兒の言語
- 三、乳兒の養育
- 四、幼兒の身體
- 五、小兒の發育
- 六、小兒の形態及生理
- 七、小兒の精神
- 八、小兒の言語
- 九、(外數百項省く)

東京高等師範學校教授 廣井京太先生著

姿勢教育 (五版)

定價 三、〇〇 送料 一、二〇

# 土川五郎氏還曆記念祝賀會

本年は土川五郎氏のために極めて喜びの多い年であります。先づ矍鑠たる健康を以て還曆を迎へらるゝと共に、教育に従事せられてから四十年、幼児教育に身を委ねられてから二十二年、遊戯の研究に志されてから二十年、初めてその創作を發表せられてから十五年、更に進んで、現に園長たる瑞穂幼稚園を開かれてから十年、現に所長たる東京昭和保姆養成所を設けられてから五年といふ、重ね／＼記念すべき年に當つて居ります。而して、其の間不斷の研究精進をつゞけられ、又常に全國に互つて廣く講習の指導にあたられ、斯の教育に對して貢獻せらるゝまゝの實に至大いにはなければなりません。しかも、氏の將來は更に々々期待すべきもの多く、一層の研究活動ミを以て益々斯界に寄與せらるべきことを信じ又祈りて已まぬものであります。乃ち氏の公私の知友及び門下相謀り、茲に、氏の誕生日たる十二月四日を期して記念祝賀の會を催し、同氏及御一家をお招きして、聊かお祝ひの心を表はすことに準備いたしました。就ては何卒貴下の御會同を得て此の會が一段の光りを添へ、お目出度き賑ひのいやが上にも盛大なり得るやう、切にお願ひ申上ぐる次第であります。

土川五郎氏還曆記念祝賀會準備委員代表

昭和七年十一月

倉橋惣三

## ○發起人

(イロハ順)

巖谷小波	岩村清四郎	堀七藏	外山國彦	千葉ひで	及川ふみ
岡崎常太郎	小田島省三	和田實	田島眞治	中山晋平	野口雨情
久留島武彦	倉橋惣三	葛原齒	梁田貞	藤井利譽	小向きみ
小松耕輔	朝原梅一	齋藤金造	西條八十	櫻井美	岸邊福雄
北原白秋					

其他二百二十餘氏

## ○土川五郎氏還曆記念祝賀會次第

一、日時 十二月四日(日曜日)

一、會場 神田一ツ橋、帝國教育會館

(一) 童話、音樂、遊戯の會

一、午後一時より、大講堂

一、プログラム二面の通り

(二) 祝賀晚餐會

一、會員券金參拾錢  
一、午後五時より、大食堂にて  
一、會費 金 貳 圓

# 土川五郎氏還曆記念子ども會

日時 拾貳月四日(日)午後一時開會  
會場 神田一ツ橋帝國教育會

(會員券金參拾錢)

## プログラム

一 開會の辭  
一 獨唱  
倉橋惣三  
平井英子

イ 砂山  
北原白秋詩  
伴奏 中山晋平

ロ 毬と殿様  
西條八十詩  
中山晋平曲

ハ アメフリ  
北原白秋詩  
中山晋平曲

一 童話  
岸邊福雄  
瑞穂幼稚園兒有志

一 遊戯  
東洋幼稚園兒有志  
武岡鶴代

一 ソプラノ獨唱  
伴奏 榊原直  
イ カンタータ  
(キリスト降誕祭)  
パツハ曲

ロ 樹立  
三木露風詩  
山田耕風詩

ハ 唄  
三木露風詩  
山田耕風詩

一 遊戯  
常盤幼稚園兒有志  
朝海幼稚園兒有志

一 遊戯  
目白幼稚園兒有志  
久留島武彦

一 童話  
外山國彦  
バリトン獨唱  
伴奏 榊原直

イ 「ファウスト」中のカヅアチナ  
ロ 風車  
グ  
山田耕作曲

一 童話  
土川五郎氏御挨拶  
巖谷小波

一 遊戯  
昭和保姆養成所生徒  
瑞穂幼稚園兒有志

一 合唱  
昭和保姆養成所生徒  
葛原貞曲

イ 瑞穂幼稚園園歌  
葛原貞曲  
小松耕輔曲  
瑞穂幼稚園兒一同

ロ 園長さん  
葛原貞曲  
山田貞詩  
昭和保姆養成所生徒

ハ 山彦  
和田實

一 閉會の辭  
和田實